

# 過去完了時制解明への一つの試み—(二)—

諏訪田 清

## 第六機能

過去完了時制の機能として最後に挙げるべきものがある。次の例がそれである：

Nach sechs Wochen war ein Brief von Heinz gekommen ; er brachte gute Nachricht ; wegen kecken Zugreifens im rechten Augenblick **hatte** der Kapitän freiwillig seine Heuer **erhöht**. Die Mutter trat herein, als ihr Mann den Brief soeben in die Tasche steckte. „Ich darf doch auch mitlesen?“ frug sie scheinbar. „Du hast doch gute Nachricht?“

(Storm : Hans und Heinz Kirch)

下線の過去完了時制は動作の完了を《報告》している。しかし作者のシュトルムによって直接に確認された動作の完了を《報告》しているものではない。過去完了時制は、ここでは、手紙から知りえた動作の完了を《報告》する形式をとっているのである。このように間接的に知るに至った動作の完了を《報告》する過去完了時制の機能を過去完了時制の「第六機能」と呼ぶことにする。<sup>1)</sup>

過去完了時制の機能の概略は以上の通りである。これから各機能について詳細に検討していきたい。

定形と完了分詞とを以て構成される過去完了時制に於てはまず定形にてある動作の完了を確認した旨発言される作業が行われる。次に完了分詞にてその動作の完了が行われる。過去完了時制を考察するに際してはまずこの構造に留意することが必要である。定形ではどんな動作であるか、それを不問にしてとにかくある動作の完了を確認したという発言だけが行われる。<sup>2)</sup> その動作がいかなるものであるかは完了分詞にて始めて明らかにされる。同時に完了分詞にてその動作の完了が行われる。<sup>3)</sup>

過去完了時制——現在完了時制も同じである——はこのような構造になっている。一つの例、それも便宜的に現在完了時制で考えてみよう：

Ich habe ein Buch gekauft.

定形 *habe* にてある動作の完了を確認した旨の発言が行われる。次に *ein Buch* が現われる。しかしこの段階では *ein Buch*, 即ち、一冊の本を対象にしてどのような動作の完了が行われたのかまだ明らかでない。<sup>4)</sup> 一冊の本ということが示されたことによって主語が定まっているのに述語となる完了分詞が現われていないのである。<sup>5)</sup> ようやく文末にて完了分詞が現われ、這般の動作が *kaufen* であるということが知らされる。

これで過去完了時制の《報告》という機能にアプローチできよう。まず定形にてある動作の完了を確認した旨の発言がされる。そのことによって聞き手は関心を惹きつけられる。確認したと発言された動作の完了が一体いかなる動作の完了であったのかに彼は注目する。その状態に置かれたままの彼によりやく完了分詞にて疑問が解き明かされる。過去完了時制は謂わば〈二段構え〉の構造である。《定形第2位》によって相手の関心を可能な限りすばやく惹くことができる。<sup>6)</sup> 他方、完了分詞は文末に位置することによっていかなる動作の完了であるかを聞き手に対して最大限に示すことができる。<sup>7)</sup>

定形と完了分詞との二つによって一つの動作の完了を確認したと相手に対して最大限に〈訴える〉機能を過去完了時制は持っている。かかる機能がこの時制に認められている《報告》という機能である(《》という印は過去完了時制の機能として既に認められてきているということを示している)。

過去完了時制は動作の完了の確認を最大限に〈訴える〉、即ち、《報告》する。それはまた《報告》する主体が前面へ出ることでもある。《報告》する主体が前面へ出ることによって動作の完了の確認を聞き手に最大限に〈訴える〉ことができる。《報告》を行なう主体、それは〈私〉である。過去完了時制に於ては動作の完了の《報告》の際に〈私〉が前面へ出てくるのである。この間のことをリントグレンも指摘している。リントグレンは現在完了時制についてだが次のように述べている：

私は次のことを云いたい、それは私が現在完了時制に現在と係わりがあるということとならねばつきりと《私が係わっていること》(Ich-Bezogenheit)

を感ずるということである。<sup>8)</sup>

リントグレンの注釈はその中の《現在完了時制》を《過去完了時制》に、《現在》を《過去》に移しかえるとそのまま過去完了時制にもあてはまる。過去完了時制に於ては〈私〉が係わっているのである。

過去完了時制の《報告》という機能を考察するに際してはこの点を踏まえておく必要がある。

過去完了時制におけるこの点は、しかし、アクチュアルに研究されている現在完了時制の機能から類推することも可能であろう。過去完了時制を考察するに際して寧ろ重要な点はこの時制に於ける《報告》がいかなる時点で完了した動作を対象としているかということである。この点に関しては管見するに余りにも簡単に片づけられすぎている。過去完了時制は《報告》時点である過去の一時点よりも以前に生じた動作の完了を《報告》するものである、つまり、過去完了時制の本質は *Vorzeitigkeit* を表現することにある、という注釈が大部分なのである。過去完了時制は、前稿にて述べたごとく、一連の動作の完了の《描写》の流れの中で行なわれる動作の完了を《報告》する機能をも持っているのである。 *Vorzeitigkeit* を表現することを過去完了時制の本質とするかぎりこの機能——この機能は誤った解釈から生じたものではない——は説明できない。

結論を示そう。完了時制に特有な《前傾性》のゆえに過去完了時制が *Vorzeitigkeit* を表現することはある。しかし《前傾性》は完了時制の持つ性質の一部にすぎず、従って過去完了時制が常に *Vorzeitigkeit* を表現するわけではない。過去完了時制は一連の動作の完了の最後に行われる動作の完了を《報告》して場面の締めくくりとするのがそもそもの出発点である。そしてその出発点となるのが前稿にて示した「第一機能」の過去完了時制である。次の例も「第一機能」の過去完了時制である：

Der Alte (=Hans Kirch) sah ihn (=Heinz Kirch) mit erschrockenen Augen an. „Was sagst du?“ frug er so leise, als ob es niemand hören dürfe.

Aber bevor eine Antwort darauf erfolgen konnte, wurden schwerfällige Schritte draußen auf der Treppe laut ; die Tür öffnete sich, und von Frau Lina geführt, trat Tante Jule in das Zimmer. Während sie, pustend und mit beiden Händen sich auf ihren Krückstock lehnd, stehenblieb, **war** Heinz

an ihr vorüber schweigend aus der Tür **gegangen**.

„Ist er fort?“ sagte sie, mit ihrem Stocke hinter ihm her weisend.

(Storm : Hans und Heinz Kirch)

過去完了時制の効果は大である<sup>10)</sup>。過去完了時制によって〈私〉——〈私〉とは〈私〉の気持である——が前面へ出てきている。この過去完了時制はハインツが伯母の脇をぬけて黙って部屋から立ち去ったという動作の完了を《報告》している文であるが、この《報告》にはハインツのとった行動に対する作者の気持が反映している<sup>11)</sup>。

物語に於て《描写》から《報告》へ転換するとしよう。それは、勿論、読み手を意識して行なわれるのであるが、この転換によって語り手である〈私〉の気持がたちまち前面へ出てくる。それと並行して読み手の心の中にも同じ気持が湧いてくる。場面は終りとなる。出来事は今後どんな展開をとげるのであろうか、そんな気持を読み手に抱かせる<sup>12)</sup>。場面の終りで用いられる「第一機能」の過去完了時制の効果は大きい<sup>13)</sup>。

「第一機能」の過去完了時制と同じように場面の終りで用いられながらこの機能とはっきり区別されるのが「第二機能」の過去完了時制である。いくつかの動作の完了から構成される場面はその終りが動作の完了の《描写》であっても、あるいは、「第一機能」の過去完了時制による動作の完了の《報告》であっても構わない。いずれにしても場面の最後の動作の完了は一つの時間の流れの中で行なわれる最後のものである。ただし、「第一機能」の過去完了時制によって動作の完了が《報告》されて場面が終っているのではなく、過去時制による《描写》で場面が終ってもよいと考えられるときに同じ時間の流れの中で後に行われた動作の完了を《報告》して場面の締めくくりとすることがある。「第二機能」の過去完了時制はそのようなときに用いられる。次がその例である：

Heinz sah nachdecklich den Knaben an. „Tu das nicht, Karl ; die Wasserfrauen sind falsch ; bleib lieber in deines vaters Stor und spiel mit deines Nachbarn Katze.“

Die Hand der Schwester legte sich auf seine Schwester : „Du wolltest mit mir zu unserer Mutter Grabel!“

Und Heinz setzte den Knaben zur Erde und ging mit Frau Lina nach dem Kirchhof. Ja, er **hatte** sich später auch von ihr bereden **lassen**, den alten

Pastor, der jetzt mit einer Magd im großen Pfarrhaus wirtschaftete, und sogar auch Tante Jule zu besuchen, um die der Knabe Heinz sich wenig einst gekümmert hatte.

So war der Sonntagvormittag herangekommen, und die jungen Eheleute rüsteten sich zum gewohnten Kirchgang ; …

(Storm : Hans und Heinz Kirch)

《…。妹は兄の肩に手をあてた。「いっしょにお母さんの墓参りに行きましょう」。ハインツは子供を下におろして、リーナーといっしょに墓地へ行った》。ここで場面を終えることも可能である。しかし同じ時間の流れの中でその後にハインツの行った行為は今までの経緯からして読み手の予想を上まわる嬉しいものであることは確実であり、その旨は謂わばく追加の形でも読み手にはっきりと示したい。そのような要請から上の過去完了時制は用いられ、かつ、場面の締めくくりの役割を果たしている。

次の過去完了時制も以上のことを踏まえて読む必要がある：

…。 Am andern Morgen ward der getreue Johannes verurteilt und zum Galgen geführt, und als er oben stand und gerichtet werden sollte, sprach er: »Jeder, der sterben soll, darf vor seinem Ende noch einmal reden, soll ich das Recht auch haben?« »Ja«, antwortete der König, »es soll dir vergönnt sein.« Da sprach der treue Johannes: »Ich bin mit Unrecht verurteilt und bin dir immer treu gewesen«, und erzählte, wie er, um seinen Herrn zu retten, das alles hätte tun müssen. Da rief der König : »O mein treuester Johannes, Gnade! Gnade! Führt ihn herunter.« Aber der treue Johannes war bei dem letzten Wort, das er geredet hatte, leblos **herabgefallen** und war ein Stein.

Darüber trug nun der König und die Königin großes Leid, …

(Grimm : Der treue Johannes)

《…。(自分の誤解に気づいて) 王は叫んだ。「嗚呼。私のこのうえなく忠実なヨハネスよ。赦してくれ。赦してくれ。ヨハネスを降ろせ》。気分はこのうえなく高まって場面はここで終了してもよいくらいである。この後に行なわれた動作は過去完了時制を用いて《報告》されなければならないということが予

想される。果して過去完了時制が現われ、忠実な下僕ヨハネスの非業な死に対する作者の気持が前面へ出て場面は終わっている。<sup>14)</sup>

「第二機能」の過去完了時制が「第一機能」の過去完了時制から区別されることがこの二つの例を通してはっきり見てとれる。「第二機能」の過去完了時制は〈追加〉されたものであり場面の終りに絶対不可欠のものではないのである。<sup>15)</sup>

「第二機能」の過去完了時制と一見したところ同じ働きをしているように見えながら峻別される過去完了時制がある。最後の動作の完了が行なわれて場面は終了を迎える。このときそれまで行われた動作の完了を総括して場面を締めくくりたいとすることがある。その際に過去完了時制が現われる。この過去完了時制を「第二機能」の過去完了時制と呼ぶことにする。<sup>16)</sup>次がその例である：

… Als er (=der älteste Sohn) in den Wald kam, begegnete ihm ein altes graues Männlein, das bot ihm einen guten Tag und sprach: »Gib mir doch ein Stück Kuchen aus deiner Tasche und laß mich einen Schluck von deinem Wein trinken, ich bin so hungrig und durstig.« Der kluge Sohn aber antwortete: »Geb ich dir meinen Kuchen und meinen Wein, so hab ich selber nichts, pack deiner Wege«, ließ das Männlein stehen und ging fort. Als er nun anfang, einen Baum zu hauen, dauerte es nicht lange, so hieb er fehl, und die Axt fuhr ihm in den Arm, daß er mußte heimgehen und sich verbinden lassen. Das **war aber** von dem grauen Männchen **gekommen**.

Darauf ging der zweite Sohn in den Wald, …

(Grimm : Die goldene Gans)

一番うへの息子が森で小人に出会う、小人は息子に食べ物と飲み物を乞う、息子はそれを断わる、息子が木を切り始めると失敗し腕に怪我をする、息子は家へ帰り傷の手当をすることを余儀なくされる、こういったことが《描写》されている。場面は最後の動作の完了の《描写》で終えることも可能であろう。そのときに過去完了時制が現われる。《これは小人の仕業であった》という動作の完了が《報告》され場面が終る。この過去完了時制、即ち、「第二機能」の過去完了時制はそれまでに《描写》されてきた動作の完了を謂わば〈総括〉しながら直前に《描写》された動作の完了に関連した〈注釈〉をしたり、あるいは、〈判断〉を提示しているのである。<sup>17)</sup>

「第二機能」の過去完了時制による《報告》は〈追加〉された〈私〉の〈注釈〉であったり、あるいは、〈私〉の〈判断〉である。それゆえに〈困みに〉という形で上例のように aber を伴ったり<sup>18)</sup>、あるいは、下例のように und を伴って場面の終りに位置することが多い：

Wie nun Zweiäuglein so von dem schönen Rittersmann fortgeführt ward, da beneideten die zwei Schwester ihm erst recht sein Glück. »Der wunderbare Baum bleibt uns doch《,dachten sie,》können wir auch keine Früchte davon brechen, so wird doch jedermann davor stehenbleiben, zu uns kommen und ihn rühmen; wer weiß, wo unser Weizen noch blüht!《Aber am andern Morgen war der Baum verschwunden und ihre Hoffnung dahin. Und wie Zweiäuglein zu seinem Kämmerlein hinaussah, so stand er zu seiner großen Freude davor und war ihm also nachgefolgt.<sup>19)</sup>

Zweiäuglein lebte lange Zeit vergnügt. …

(Grimm : Einäuglein, Zweiäuglein und Dreiäuglein)

ここで「第二機能」の過去完了時制が話法の助動詞によって構成される場合について考えてみよう。その前にまず話法の助動詞について概観しておきたい。

話法の助動詞は話法性を、橋本文夫氏の言葉を借りれば、《認定》する助動詞である。話法の助動詞を用いた文に於ては動詞がいかなる話法性を帯びているか、それを話法の助動詞を用いて《認定》することが行われている。《認定》を行うのは云うまでもなく〈私〉である。〈私〉が話法性を《認定》するのである。話法の助動詞による《認定》文に於ても過去完了時制を用いた文の場合と同じように〈私〉が前面へ出てくる。その結果、話法の助動詞による《認定》文は場面の終りにも用いられることが明らかになってくる。

以上のことを踏まえたうえで話法の助動詞による文が場面の終りに位置した場合のことを考えよう。直ちに考えられることは話法の助動詞による《認定》も、場面の終りに位置する「第二機能」の過去完了時制による動作の完了の《報告》と同じく、場面にて生じた動作の完了を〈総括〉したうえで場面の最後にて《描写》された動作の完了に関連した次の局面での動詞の話法性を《認定》しているということである。

ここに至って少なくとも一つだけ明らかになってくることがある。それは次

のことである。話法の助動詞による《認定》が場面の最後に《描写》された動作の完了の次に位置する局面での動詞に対して行われるために、話法の助動詞はこの最後に《描写》された動作の完了の次にその動作の完了と関連した動作が《必然的》に生ずることになるという話法的な《認定》、即ち、müssen である場合が多いということである。<sup>21)</sup> müssen を用いた文が場面の最後に位置することによってそこでは最後に《描写》された動作の完了に関連してその動作の完了がある動作を生ぜしめるにいたることになったという《必然性》が《認定》されているのである。次はその一例である：

… »Der Traum könnte wahr gewesen sein(, sprach der König, )ich will dir einen Rat geben, stecke deine Tasche voll Erbsen und mache ein klein Loch in die Tasche, wirst du wieder abgeholt, so fallen sie heraus und lassen die Spur auf der Straße.« Als der König so sprach, stand das Männchen unsichtbar dabei und hörte alles mit an. Nachts, als es die schlafende Königstochter wieder durch die Straßen trug, fielen zwar einzelne Erbsen aus der Tasche, aber sie konnten keine Spur machen, denn das listige Männchen hatte vorher in allen Straßen Erbsen verstreut. Die Königstochter aber **mußte** wieder bis zum Hahnenschrei Magdedienste tun.

Der König schickte am folgenden Morgen seine Leute aus, …

(Grimm : Das blaue Licht)

müssen の用いられた文によって話し手がこの場面の終りに臨んでそれまでの出来事の経過を踏まえてこの場面の締めくくりをしていることが見てとれる。場面は本来ならば次の文、即ち、《抜け目のない小人はあらかじめすべての通りに豌豆を撒いておいたから》で終了してもよいはずである。否、この文も過去完了時制であり話し手が締めくくりの《報告》をしているものであるから、《夜に小人は眠っている王女をまたもや通りを通して連れ去った》というように終えることも可能である。そのように考えるならば müssen を用いた文が場合の締めくくりの効果を高めていることが一層明らかになってくる。<sup>22)</sup>

次の müssen も這般の観点から用いられたものである：

… Frühmorgens, ehe die Kinder erwacht waren, stand sie schon auf, und als sie beide so lieblich ruhen sah, mit den vollen roten Backen, so murmelte sie

vor sich hin: »Das wird ein guter Bissen werden.« Da packte sie Hänsel mit ihrer dünnen Hand und trug ihn in einen kleinen Stall und sperrte ihn mit einer Gittertüre ein ; er mochte schreien, wie er wollte, es half ihm nichts. Dann ging sie zur Gretel, rüttelte sie wach und rief: »Steh auf, Faulenzerin, trag Wasser und koch deinem Bruder etwas Gutes, der sitzt draußen im Stall und soll fett werden. Wenn er fett ist, so will ich ihn essen.« Gretel fing an, bitterlich zu weinen, aber es war alles vergeblich, sie **mußte** tun, was die böse Hexe verlangte.

Nun ward dem armen Hänsel das beste Essen gekocht, ...

(Grimm : Hänsel und Gretel)

... Und wenn Gretel darin war, wollte sie (=die Hexe) den Ofen zumachen, und Gretel sollte darin braten, und dann wollte sie's auch aufessen. Aber Gretel merkte, was sie im Sinn hatte, und sprach: »Ich weiß nicht, wie ich's machen soll ; wie komm ich da hinein?« »Dumme Gans« ,sagte die Alte, »Die Öffnung ist groß genug, siehst du wohl, ich konnte selbst hinein «,krappelte heran und steckte den Kopf in den Backofen. Da gab ihr Gretel einen Stoß , daß sie weit hineinfuhr, machte die eiserne Tür zu und schob den Riegel vor. Hu! da fing sie an zu heulen, ganz grauselig ; aber Gretel lief fort, und die gottlose Hexe **mußte** elendiglich verbrennen.

Gretel aber lief schnurstracks zum Hänsel. ...

(Grimm : Hänsel und Gretel)

話法の助動詞 **müssen** が場面の締めくくりとして用いられている例およびその経過は以上のとおりである。

話法の助動詞によって「第二機能」の過去完了時制が構成される場合について述べてみたい。次がその例である：

... Nach einigen kurzen und dringenden Fragen gestand sie ihm endlich, daß während seiner Abwesenheit kein Geringerer als Prinz Kajeten eine heftige Leidenschaft zu ihr gefaßt und geschworen hätte, sich ein Leids anzutun, wenn er nicht erhöht würde. **Es war nur natürlich, daß sie ihm schließlich hatte nachgeben müssen**, um nicht das Herrscherhaus und das Land in

namenlose Trauer zu versetzen.

Mit ziehmlich gebrochenen Herzen verließ Leisenbohlg die Stadt und kehrte nach Wien zurück. …

(Schnitzler : Das Schicksal des Freiherrn)

下線の文は場面の終わりにて現われる müssen を用いての過去時制による《認定》と〈私〉の気持が前面へ現われる過去完了時制による《報告》とが合体したものである。この合体によって場面は効果のある終りを遂げたと云える。即ち、最後に《描写》された動作の完了が必然的に生じさせることになる《認定》された動作をさらに過去完了時制を用いて《報告》することによって、„nur natürlich“ というように〈私〉の気持をはっきりと (ausdrücklich) 言葉として読み手に示している。おそらくは、ここに狙いがあったのであろうが、そのために読み手は終了場面にて前面へ出た〈私〉の気持にしばし圧倒されたままになる。<sup>23)</sup>

1987年10月

#### 注

- 1) 過去完了時制の「第六機能」は現在完了時制にも認められる。橋本文夫氏は現在完了時制と過去時制を対比して次のように述べている：〈…、話者みずから目撃しなかった、乃至直接見聞しなかったことを語るには必ず現在完了を用いる…〉(橋本文夫著『詳解ドイツ大文法』三修社 1969年 195頁)。
- 2) 定形はその意味で文字どおり Hilfsverb である。
- 3) 完了分詞は、前稿にても指摘したように (109頁 注5)、動作の完了だけを意味する動詞の分詞であり、過去という特定の時点を指すことはない。そもそも過去分詞が未来完了時制の構成要素となることはありえないのである。完了分詞に過去の観念が生ずるように思えるのは、過去完了時制に限定すれば定形が過去時制であることによる。
- 4) この場合には〈…どのような動作の完了が行われた…〉としか日本語では云えない。完了分詞は動作が完了するということだけを示すのであるけれど、定形によって動作の完了を確認した旨の発言が行われているからである。
- 5) 厳密に云えば ein Buch gekauft は〈主語＋述語〉に近い関係にある。ein Buch は四格目的語で主語ではなく、また、gekauft も完了分詞で定形ではないからである。
- 6) 決定疑問文を除いて《定形第2位》が文に於て定形のとりうる最もはやい位置である。
- 7) 文末の位置については橋本文夫氏が《定形要素後置の原則》として詳しく述べてい

る（前掲書 570 - 581頁）。蛇足ながら否定辞 nicht が文末に位置する場合も文末の与える効果の大きいことによる。この点については Walter Weiß が次の論文に於て詳しく述べている：Die Negation im deutschen Satz I, II (Wirkendes Wort 11 (1961) S. 65 - 74, S. 129 - 140)。

尚、過去完了時制は副文に於て定形が省略されることがある。主文の定形が過去時制であることによって副文に位置する完了分詞の意味する動作の完了は行れたとみなされることによる。この点からも定形は《第2位》に位置することを本分としていることがわかる。過去完了時制の定形は文末に位置した場合には自分の役割を本来ほどに発揮することができないのである、クレーゲによれば《色あせている》(verblaßt) のである (Wolfhard Kluge : Perfekt und Präteritum im Neuhochdeutschen Diss. 1961 S. 23)。

- 8) Kaj B. Lindgren : Über den oberdeutschen Präteritumschwund Helsinki 1957 S. 39  
太字は筆者による。リントグレンのこの注釈はヴァインリヒが引用しているが („Tempus“ S. 64)、その引用文の邦訳は誤っている (84頁)。大事な箇所ゆえに両者を掲げておく。原文は次のようになっている：《Kaj B. Lindgren schließlich verzeichnet beim deutschen Perfekt eine gewisse Ich-Bezogenheit《und...》。他方、邦訳は次のようである：《結局リントグレンは、ドイツ語の現在完了に、ある程度 (太字は筆者——注) の「Ich [私] との関連性》があることを認め…》。

現在完了時制、従ってまた過去完了時制にはリントグレンの指摘するように《私が係っていること》(Ich-Bezogenheit) が《はっきり》と認められるのであって《ある程度》ではないのである。gewiß を誤って解釈したことから生じた誤りと思われる。

- 9) スィーダとボイゲルも同じことを指摘している：U. Suida / G. Beugel : Die Vergangenheitstempora in der deutschen geschriebenen Sprache der Gegenwart München 1972 S. 160
- 10) 過去完了時制で書かれたこの箇所は前後に多少の変更を施せば過去時制も可能となるかも知れない。なぜこのようなことを述べるかと云えば、「第一機能」の過去完了時制は過去時制から派生したものと考えられるからである。ウンダーリヒは、現在完了時制について、この時制は現在に対する関係が除外された状態で過去時制の期待されるはずの文中に侵入し始めた、と述べているが (Hermann Wunderlich : Der deutsche Satzbau Stuttgart 1901 S. 214)、この注釈は過去完了時制の原初的機能を考えるに際して大いなる手助けとなるであろう。過去完了時制もその成立当初はおそらく過去時制とその機能が余り変わらないゆえに過去時制が期待される文中に入ってきた、そしてその後過去時制と同じ《描写》の働きを持ちながらも動作の完了に《私》を含ませて《報告》する働きを次第に獲得して複合時制としての機能を発揮するようになった、そのように思われるのである。

尚、本文の過去完了時制で書かれた箇所はたとえ多少の変更によって過去時制が可能となっても過去完了時制のほうが断然よろしい。過去時制には《私》の気持を動作

の完了に盛る機能が過去完了時制ほどにないからである。過去完了時制、さらには現在完了時制に内在するこのような機能は、前稿で述べたところによれば、動作の完了を重要なものとして《報告》する働きでもあるが(101頁)、この働きは、クルーゲによれば、英語の完了時制にはないようである。クルーゲは次のように述べている：《ドイツ語の現在完了時制は重要なことを強調して表現することができることによって英語の現在完了時制から区別される》(Kluge : ebenda S. 22)。

- 11) 過去完了時制は要するに《主観的な》時制なのである。そのことは前稿にて挙げたヴァインリヒのほかにもクルーゲ、ヴェーバー、フレミッヒによっても指摘されている：

W. Kluge : ebenda S. 18

Hans Weber : Das Tempussystem des Deutschen und des Französischen Bern 1954 S. 98

Walter Flämig : Zur Funktion des Verbs—1. Tempus und Temporalität in : Deutsch als Fremdsprache 4 / 1964 S. 4 f.

- 12) 場面の終りに用いられる「第一機能」の過去完了時制は読み手に次の場面での出来事の展開を旺盛に想像させる。このことは、勿論、過去完了時制の構造によるのである。非完結相動詞単独ではなく非完結相動詞と完了分詞とによって構成されている「第一機能」の過去完了時制は動作の完了の終了過程の《描写》と終了した後の状態の《報告》とを同時に行なう。即ち、「第一機能」の過去完了時制に於ては動作の完了が、完了分詞が終了相に該当するゆえに、1/3だけ《描写》され、従って文の全体から言えば残りの2/3が動作の完了の与えた効果として非完結相動詞の有する状態相によって《報告》される構造になっている。この構造を持つ「第一機能」の過去完了時制によって《報告》された動作の完了は過去時制による単なる《描写》でないために読み手にはただならぬものとして感じられる。彼は次の場面での出来事の展開を心待ちにする。

ここで補足の形で説明しておかなければならないことがある。それは「第一機能」の過去完了時制に於ては動作の完了は1/3だけしか《描写》されないとしてもそれが文末にて行なわれるためにこの数値が実際の数値以上のものとなっていることである。他方、動作の完了の確認をした旨の《報告》がされる定形には2/3の力があらかじめ与えられているが、この定形は、非完結相動詞から成っているために、また次の場面での出来事の展開を想像させる謂わば〈間〉ともなっている。

尚、定形は haben あるいは sein からつくられる。この二つの非完結相動詞がなぜ過去完了時制の構成要素となったのかということについては述べるまでもないことであるが、定形にはもはや haben あるいは sein の本来の意味はなく、這般の機能を果たすものと形式化してしまっていると考えらる必要がある。

- 13) 前稿で挙げた「第一機能」の過去完了時制も次の新たな場面を想像させるに十分な効果を持っている。前後を拡大して再掲載する：

Hans Adam zitterte, seine Oberlippe zog sich auf und legte seine vollen Zähne bloß. „Schwatz nicht!“ sagte er. „Sprich lieber, woher weißt du das?“

„Woher“ Frau Jule schlug ein fröhliches Gelächter auf—„das weiß die ganze Stadt, am besten Christian Jensen, in dessen Boot die Lustfahrt vor sich ging! Aber du bist ein Hitzkopf, Hans Adam, bei dem man sich leicht üblen Bescheid holen kann ; und wer weiß denn auch, ob dir die schmucke Schwiegertochter recht ist? Imübrigen“ —und sie faßte den Bruder an seinem Rockkragen und zog ihn dicht zu sich heran—, „für die neue Verwandtschaft ist’s doch so am besten, daß du nicht auf den Rats-herrnstuhl hinaufgekommen bist.“

Als sie solcherweise ihre Worte glücklich angebracht hatte, trat sie zurück. „Komm, Peter, vorwärts!“ rief sie dem Jungen zu, und bald **waren** beide in einer der vom Markte auslaufenden Gassen **verschwunden**.

Hans Kirch stand noch wie angedonnert auf derselben Stelle. …

(Storm : Hans und Heinz kirch)

Als das Frühjahr herangekommen und draußen alles grün war, sagte der Bär eines Morgens zu Schneeweißchen : }Nun muß ich fort und darf den ganzen Sommer nicht wiederkommen.< }Wo gehst du denn hin, lieber Bär?< fragte Schneeweißchen. }Ich muß in den Wald und meine Schätze vor den bösen Zwergen hüten : in Winter, wenn die Erde hartgefroren ist, müssen sie wohl unten bleiben und können sich nicht durcharbeiten, aber jetzt, wenn die Sonne die Erde aufgetaut und erwärmt hat, da brechen sie durch, steigen herauf, suchen und stehlen ; was einmal in ihren Händen ist und in ihren Höhlen liegt, das kommt so leicht nicht wieder an des Tages Licht.< Schneeweißchen war ganz traurig über den Abschied, als es ihm die Türe aufriegelte und der Bär sich hinausdrängte, blieb er dem Türhaken hängen, und ein Stück seiner Haut riß auf, und da war es Schneeweißchen, als hätte es Gold durchschimmern gesehen ; aber es war seiner Sache nicht gewiß. Der Bär lief eilig fort und **war** bald hinter den Bäumen **verschwunden**.

Nach einiger Zeit schickte die Mutter die Kinder in den Wald, Reisig zu sammeln.

(Grimm : Schneeweißchen und Rosenrot)

前者に於ては、場面の終りの「第一機能」の過去完了時制は姉のユーレ夫人の言葉が弟のハンス・アダムにとっていかに衝撃的なものであったかの場面を導く役割を果たしている。作者としては姉の発言の後に弟の受けた痛手を直ちに述べることもできたであろう。しかし弟をかかると心境へ陥れた姉のその後の気持を先に読み手に伝えたほうが読み

手は弟の受けた痛手の大きさを鮮明に感じるに相違ない、そのような判断が作者に働いたと思われる。僅か四行の場面——ハンス・アダムの痛手を鮮明に伝えるものであるからこの場面は短かいものでなければならない——が現われ、この中で姉の嬉しさが読み手に知らされる。姉が自分の子供を連れて通りに消えて場面は終るが、この動作の完了が「第一機能」の過去完了時制によって《報告》されることによって姉の謂わば „Schadenfreude“ が読み手にひしひしと伝わってくる。と同時に弟のハンス・アダムのことが気になってくる。次の場面は姉から痛手を受けてその場に残っている弟の出来事で始まるはずである。果して冒頭の文は《彼は雷に打ちのめされたように (wie angedonnert) その場にまだ (noch) 立ちつくしているのであった》である。

他方、後者に於ける「第一機能」の過去完了時制は母子三人に別れを告げて森の中へ消えて行った熊の今後がどのようなのかを読み手に想像させる。その後の展開に於て当の熊はなかなか登場せず、この物語の終わり近くになってやっと現われる。その間読み手の気をもませるが、しかし、這般の「第一機能」の過去完了時制によって熊のことがいつか話題になるだろうという気持を読み手は捨て去ることができない。その証拠に熊が現われるまで大きな場面を二つ経るが、それぞれの場面の終りはいずれも過去時制であり、過去完了時制は現われてこないのである。仮にその二箇所のどちらかにでも過去完了時制が現われたらそこで読み手の期待は裏切られるであろう。

ここで「第一機能」の過去完了時制と過去時制がそれぞれ異なるために生ずる一つの現象に触れてみたいと思う。「第一機能」の過去完了時制は、注12)で若干触れたように、動作の完了を《描写》しながら《描写》の中に〈私〉の気持を盛りこむ働きを持つものである。この働きによって「第一機能」の過去完了時制で《報告》された動作の完了は読み手にただならぬものと感じられ読み手の気持は一気に高まる。この気持が読み手に次の場面でいかなる展開をとげるのかという期待を抱かせる。

他方、過去時制による動作の完了の《描写》の際にはいかなることが生じるであろうか。動作の完了が場面の終りにて《描写》された場合について考えてみよう。その場合には二つのことが浮かんでくる。一つはその次に新たな場面が生ずる場合であり、他の一つはそれで物語が終る場合である。後者の場合には、前稿にて述べたように (110—111頁 注8)、過去時制による《描写》に続いてさらに現在完了時制、あるいは、現在時制による話し手の注釈が加わることがある。では前者の場合にはどうであるかと云えば、物語の終りに用いられる動作の完了の《描写》が場面の終りに用いられているのだと考えられる。即ち、前者は後者に含まれるのである。各々の場面は極論すれば謂わば〈小さな物語〉である。

このことから次のことが生じてくる。各場面は独立した〈小さな物語〉と云えるので二つの場面が互いに連関性のあることを強調したいときにはそういったことを意味する語、たとえば so, nun, da などの語を後に続く場面の冒頭の文の中に挿入するか、あるいは、前に位置する場面の終りに「第一機能」の過去完了時制を配置する必要がある。但し、後者の場合は、すぐ上で扱った „Schneeweißchen und Rosenrot“ に用いられた

「第一機能」の過去完了時制についての注釈でおそらく推測されるように、非常に少ないと云える。

- 14) この例に於ては過去完了時制の次に過去時制が位置しているが(Aber der treue Johannes war...leiblos herabgefallen und **war** ein Stein.), この過去時制も動作の完了を《報告》しているのである。過去時制は《描写》のほかに《報告》の機能をも持っている。この点についてはいずれ論ずる予定である。

尚、這般の過去時制を〈… und **war** ein Stein **gewesen**〉と過去完了時制にすることは云うまでもなく許されないことである。

- 15) 「第二機能」の過去完了時制はかかる性質のゆえに、即ち、謂わば〈追加〉されたものであり、場面の終りに不可欠のものではないために「第一機能」の過去完了時制と異なって次の新たな場面での出来事の展開を想像させる力に乏しい。「第二機能」の過去完了時制が用いられることによって出来事はひとまず完結した感じになる。従って次の場面が前の場面と関連のあることを指摘したいときにはその旨を意味する語を添えるのがよろしい。本稿で挙げた二つの例には新たな場面の冒頭の文にそのような語が挿入されてある (**So** war Sonntagvormittag herangekommen / **Darüber** trug nun der König und Königin großes Leid)。

他方、場面の終りが「第一機能」の過去完了時制で締めくくられているときには次の場面に前の場面を受ける語がない („Ist er fort?“ sagte sie / Hans Kirch stand noch wie angedonnert auf derselben Stelle / Nach einiger Zeit schickte die Mutter die Kinder in den Wald, Reisig zu sammeln —後の二例は前稿に挙げたものであるが、注13) に再掲載されている)。

「第二機能」の過去完了時制は這般の性質のゆえに次のような一つの文の終りにも用いられる：

Kaum aber loderten die Flamme empor, da ging's knack! knack! und der schöne Topf **war zersprungen**.

(関口存男著『冠詞——第二巻』三修社 1976年 102頁)

Er rannte den ganzen Weg, bis er zu Hause **angekommen war**.

(K. Dieling/F. Kempster : Die Tempora Leipzig 1983 S. 33)

「第二機能」の過去完了時制は《描写》された動作の完了の行われた時点と同じ時間の流れの中で後に行われた動作の完了を場面の締めくくりとして《報告》するものである。この二つの文に於ては「第二機能」の過去完了時制は場面の締めくくりのかわりに文の締めくくりとして用いられている。

尚、前稿では「第二機能」の過去完了時制を広く据えすぎた。その後検討したところ「第二機能」の過去完了時制は細分化する必要があると感じた。前稿で「第二機能」の過去完

了時制と見なしたものは他の機能の過去完了時制として扱うことにした。

16) 前稿では「第二機能」の過去完了時制として扱っていたが、新たに設けた機能である。

17) 〈注釈〉や〈判断〉の作業に於て〈私〉が前面へ出てくることは云うまでもない。

18) 次の「第二機能」の過去完了時制も aber を伴って場面の終りに位置している：

… „Deine Mutter ist auch eine Amphibie.“ hatte einmal ein großer Junge dem Mädchen ins Gesicht geschrien, als eben in der Schule die Lehre von diesen Kreaturen vorgetragen war. — „Pfui doch, warum?“ hatte entrüstet die kleine Wieb gefragt. — „Warum? Weil sie einen Mann zu Wasser und einen zu Lande hat!“ — Der Vergleich hinkte; aber der Junge hatte doch seiner bösen Lust genug getan.

Gleichwohl hielten die Pastorstöchter eine Art von Spielkameradschaft mit dem Matrosenkinde ; freilich meist nur für die Werkeltage und wenn die Töchter des Bürgermeisters nicht bei ihnen waren ; …

(Storm : Hans und Heinz Kirch)

下線の過去完了時制が「第二機能」のものであることはいわゆる《理由づけ》——〈私〉の〈注釈〉であり〈判断〉である——の doch によっても裏づけされている。

尚、過去完了時制の直前に過去時制が位置しているが、この過去時制も〈注釈〉であり〈判断〉である。従って動作の完了の《報告》を行っていることになる。

このように上例に於ては過去時制と過去完了時制の二つによって〈注釈〉あるいは〈判断〉が場面に於て最後に《描写》された動作の完了に〈追加〉されている。そして〈追加〉ということはハイフンの存在によっても知ることができる。

なぜ一方に於ては過去時制、他方に於ては過去完了時制によって〈注釈〉や〈判断〉を行っているかという疑問が生ずるかも知れないが、それは次のように説明できよう。即ち、〈注釈〉や〈判断〉を一つだけ〈追加〉して場面の締めくくりをするのであれば、過去時制ではなく過去完了時制が用いられたのであろうが、最初から〈注釈〉や〈判断〉を二つ〈追加〉して場面を閉じるつもりでいたのでそのうちの前者を過去時制、後者を過去完了時制にして後者の過去完了時制によって場面の締めくくりにしようと考えたのであろう。無論、二つの〈注釈〉あるいは〈判断〉をととも過去完了時制を用いて《報告》することもできようが、後者のほうがより重要なものと考えられたと思われる。

19) 下線の過去完了時制が「第二機能」のものであることは《即ち》の意の also が挿入されていることによっても裏づけられる。

尚、前稿に於て「第二機能」の過去完了時制として扱ったもののうちで「第二機能」の過去完了時制と認められるものは次のものである（前後を拡大して再掲載してある）：

… Der Zaunkönig aber schickte die Hornisse hinab, sie sollte sich dem Fuchs

unter den Schwanz setzen und aus Leibeskräften stechen. Wie nun der Fuchs den ersten Stich bekam, zuckte er, daß er das eine Bein aufhob, doch ertrug er's und hielt den Schwanz noch in der Höhe ; beim zweiten Stich mußte er ihn einen Augenblick herunterlassen ; beim dritten aber konnte er sich nicht mehr halten, schrie und nahm den Schwanz zwischen die Beine. Wie das Tiere sahen, meinten sie, alles wäre verloren, und fingen an zu laufen, jeder in seine Höhle ; **und hatten** die Vögel die Schlacht **gewonnen**.

Da flog der Herr König und die Frau Königin heim zu ihren Kindern und …

(Grimm : Der Zaunkönig und der Bär)

Taumelnd beinahe ging er (=Reisenbohg) mit den anderen fort. Mit Fanny begleitete er Sigurd zum Hotel, und wie aus weiter Ferne hörte er ihm zu von Kläre schwärmen. Dann führte er Fanny Ringeiser durch die stillen Straßen in der linden Nachtkühle nach Mariahilf, und wie hinter einem Nebel sah er über ihre roten Kinderwangen dumme Tränen rinnen. Dann setzte er sich in einen Wagen und fuhr vor Klärens Haus. Er sah Licht durch die Vorhänge ihres Schlafzimmers schimmern ; er sah ihren Schatten vorübergleiten, ihr Kopf erschien in der Spalte neben dem Vorhang und nickte ihm zu. Er **hatte** nicht **geträumt**, sie wartete seiner.

Am nächsten Morgen machte Freiherr von Leisenbohg einen Spazierritt in den Prater.

(Schnitzler : Das Schicksal des Freiherrn)

若干の補注する。前者に於ては最後の動作の完了の《描写》が終ったのちに und によって「第二機能」の過去完了時制が導入されているが、und の前に位置するセミコロンに注目したい。

《Punkt ではなく《報告》の行なわれることが予想される。果してまず〈追加〉の働きをする und が現われ、次いで過去完了時制がそれも定形、動作の完了を確認した旨を《報告》する定形が先頭になって現われる。定形が最初に現われたことによってやがてはっきりと姿を現わす過去完了時制が〈注釈〉あるいは〈判断〉を《報告》する「第二

機能」の過去完了時制であることは直ちに見てとれる。

「第二機能」の過去完了時制はの場合《定形正置》よりも本文のように《定形倒置》であるほうがはるかによろしい。

後者に於ては「第二機能」の過去完了時制は場面の終りに位置していないが、やはり「第二機能」のものである。従ってその次に位置している過去時制も《報告》を行っていることになる。

過去完了時制の次に過去時制がくるこの配置は次のように説明されるだろう。即ち、この場合には「第二機能」の過去完了時制によって場面の締めくくりをしてもよいのであって過去時制は謂わばこの過去完了時制に添えられているのである。換言すれば、過去完了時制が《報告》したことに對してなぜそのような《報告》を行ったのかの〈補足説明〉を過去時制は行っているのである。その〈補足説明〉の内容は改めて説明するまでのないものであり、それゆえに過去完了時制より軽い過去時制が用いられているのである。注18)に於ては過去時制の次に過去完了時制のくる配置となっているが、いま検討している例は注18)の場合とは状況が異なる。

「第二機能」の過去完了時制も「第二機能」の過去完了時制と同じように場面の締めくくりの効果を持つものであり、次の場面での出来事を想像させる力に乏しい。それゆえに次の場面に於て前の場面と密接な連関性のあることを示したいときにはその旨を意味する語が必要である (Daruf ging der zweite Sohn in den Wald (本文) / Da flog der Herr und die Frau Königin heim zu ihren Kindern (注19) / Am nächsten Morgen machte Freiherr von Leisenbohg einen Spazierritt in den Prater (注19)。

尚、次の過去完了時制も「第二機能」のものである：

Es war ein Förster, der ging in den Wald auf die Jagd, und wie er in den Wald kam, hörte er schreien, als ob's ein kleines Kind wäre. Er ging dem Schreien nach und kam endlich zu einem hohen Baum, und oben darauf saß ein kleines Kind. Es **war** aber die Mutter mit dem Kinde unter dem Baum **ingeschlafen**, und ein Raubvogel **hatte** das Kind in ihrem Schoße **gesehen** : da **war** er **hinzugeflogen**, **hatte** es mit seinem Schnabel **wegenommen** und auf den hohen Baum **gesetzt**.

Der Förster stieg hinauf, holte das Kind herunter und ...

(Grimm : Fundvogel)

「第二機能」の過去完了時制が〈私〉の〈注釈〉や〈私〉の〈判断〉を〈追加〉するものであることはこの例に於てもはっきり見てとれる。場面の半分ほど占めているこの「第二機能」の過去完了時制は不必要なくらいである。この五つの過去完了時制が謂わば〈侵入〉してきたために本来は最後に〈描写〉された動作の完了 (... und oben darauf saß ein kleines Kind) の次に位置するはずの動作の完了が次の場面の冒頭に追われてし

まった。そのために新たな場面の冒頭の文は前の場面と密接な連関性を持っているものであることを意味する語を必要としなくなっているのである。

この例は「第二機能」の過去完了時制の位置する場面と次の場面との連関性という点で例外と云える。

この例と比較すれば次の例に於ては新たな場面の冒頭の文に *aber* が存在し、そのことによって二つの場面に密接な連関性のあることがわかる：

… Als der Tanz zu Ende war, verneigte sie sich, und wie sich der König umsah, war sie verschwunden, und niemand wußte wohin. Die Wächter, die vor dem Schlosse standen, wurden gerufen und ausgefragt, aber niemand **hatte** sie **erblickt**.

Sie war *aber* in ihr Ställchen gelaufen, hatte geschwind ihr Kleid ausgezogen, Gesicht und Hände schwarz gemacht und den Pelzmantel umgetan und war wieder Allerleirauh.

(Grimm : Allerleirauh)

20) 橋本文夫記念論文集『ドイツ語と人生』三修社 1980年 71頁以下。

21) 橋本文夫氏は話法の助動詞の特性について次のように述べている（『ドイツ語と人生』78頁）：《特に重要なのはそもそも話法の助動詞による認定ということが未来性を本質とし、未来に照準を合わせたものであるという点である》。

この注釈を踏まえて場面の最後にて《描写》された完了した動作の次に位置する動作について検討すると、その動作は最後に《描写》された完了した動作の次に生ずることになっているものである、このように指摘すればよい場合が多いだろうと想像できる。

この前提に立つと「～にたちいたる」を原意とする *müssen* の用いられやすいということがわかってくる。

22) ここで注意すべきことがある。それは話法の助動詞 *müssen* を用いた文によって場面の締めくくりをしようとも *müssen* は次の局面における動作の《必然性》を《認定》しているにすぎない、その動作が完了したのかは知ることができないということである。かかる場合に *müssen* を用いた《認定》文の次に「第二機能」の過去完了時制を配置することによってその動作の完了したことを間接的に確認するとともにその過去完了時制によって場面の最後の締めくくりをすることがある。次がその例である：

… Dem Vater ward angst, und er versprach, ihm (=dem Teufel) zu gehorchen. Da ging er zu dem Mädchen und sagte: »Mein Kind, wenn ich dir nicht beide Hände abhaue, so führt mich der Teufel fort, und in der Angst hab ich es ihm versprochen. Hilf mir doch in meiner Not und verzeihe mir, was ich Böses an dir tue.« Sie antwortete: »Lieber Vater, macht mit mir, was Ihr wollt, ich bin Euer Kind.« Darauf legte sie beide Hände hin und ließ sie sich abhauen, Der Teufel kam zum drittenmal, aber sie hatte so lange und so viel auf die Stümpfe geweint, daß sie doch ganz rein

waren. Da **mußte** er weichen **und hatte** alles Recht auf sie **verloren**.

Der Müller sprach zu ihr: »Ich habe so großes Gut durch dich gewonnen, ich will dich zeitlebens aufs köstlichste halten.«

(Grimm : Das Mädchen ohne Hände)

場面の最後の過去完了時制によって《必然的》に生ずるとされた動作の完了したことが間接的に確認されている。

因みにその確認が und を用いて直ちに行なわれていることに留意したい。動作に限定すれば、und は二つの動作が連続して生ずることを意味するのであるから、この場合には《必然的》に生ずると《認定》された動作は und に導かれた過去完了時制によって直ちにその完了が確認されたことになる。

23) 過去完了時制に於ては〈私〉の気持が前面へ出てくる。この〈私〉の気持を露骨に言葉として表わしたいときには本文に挙げた構造をとる。次はその類例である：

Als ich wieder allein war, verflóg mir die gute Stimmung bald. Denn plötzlich fühlte ich wieder, daß ich nichts von Friederike wußte. **Es war mir unbegreiflich, daß mich diese Ungewißheit nicht während unseres ganzen Gesprächs gequält und eskam mir sonderbar vor, daß Friederike selbst nicht das Bedürfnis gehabt hatte, davon zu sprechen.** Denn selbst wenn ich annehmen wollte, daß zwischen ihr und ihrem Manne seit Jahren jener Stunde nicht mehr **gedacht worden war** — sie selbst konnte sie doch nicht vergessen haben. Irgend etwas Ernstes mußte damals meinem stummen Abschied gefolgt sein — wie hat sie es vermocht, nicht davon zu reden ?

(Schnitzler : Die Frau des Weisen)

尚、破線の過去完了時制は「第二機能」の過去完了時制が副文内に入ったものである。主文は《仮定の認容》を意味するものであるゆえに副文には接続法が一瞬期待される。しかし接続法が現われると副文の内容は現実を無視した前提のもとに成り立つ約束事となってしまう。この場合はそうあってはいけなないのであって副文の内容は事実として示される必要がある。かかる要請のもとに過去完了時制が現われたのである。

この過去完了時制は、主文が認容——従って〈私〉の〈注釈〉や〈判断〉——を意味するために、「第二機能」の過去完了時制であることが直ちに判明する。